

論文審査の結果の要旨

氏名：侯 鵬暉

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：日本における写真展覧会の史的研究

—戦後から写真美術館の成立まで（1945—1995）を中心に—

審査委員：（主査） 教授 原 直久

（副査） 教授 高橋 則英 教授 鈴木 保彦

本論文は、戦後日本における写真展の発展とその変遷を分析し、考察することにより、日本における写真展の特徴とそれが意味するところを明らかにしたものである。これまでの日本の写真史に関する研究は、総合的な角度から写真の表現を年代順で紹介するにとどまり、写真展の全体像について論述したものはなかったのである。

本論文の特色は、戦後の日本における写真展覧会を主要な写真月刊誌『アサヒカメラ』などに掲載された東京を中心とする写真展のデータを調査し可能な限り収集し、詳細な写真展の総合的な年表「写真展データベース」を作成していることである。これは本論文の基礎資料となったものであり、これをもとに客観的な分析と考察を行っているのであるが、こうしたオーソドックスな研究手法は評価に値するものである。

論文構成は4章からなっており、概要と所見は以下の通りである。

第1章は、日本との比較という観点から、母国台湾における写真展の歴史と現状について述べたものである。台湾では、日本のように多種多様な写真ギャラリーで写真展が盛んに行われるということはなく、1980年代に入って台北市立美術館、国立台湾美術館、高雄市立美術館の三館が開館し、それ以降美術館でも写真展が開催されるようになったのである。台湾の写真展の現状は、日本の写真展の状況とは大きく異なっていることを明らかにしている。こうした現状認識は、台湾における執筆者の活動の原動力となりうるものと考えている。今後台湾における写真界での活躍が大いに期待できる人物である。

第2章は、戦前の日本における写真展覧会について概観したものである。1893年に日本写真会の主催した「外国写真展覧会」は、日本における写真展の始まりであったこと。また大規模な展覧会としては、1931年に日本の写真表現がピクトリアリズムからの脱却のきっかけとなった「独逸国際移動写真展」などがあったことなどを指摘している。戦前の写真展覧会の実状がよくまとめられ、次の戦後の論考にうまくつなげられている。

第3章は、戦後から東京都写真美術館成立までの50年間の写真展調査を行ない、展示会場、展示方法、作家などの観点から考察したものである。

展示会場の推移では、1950年代になると戦後の社会復興にともない新しい写真専門ギャラリーが開設したが、それにつれて写真展数は顕著な増加が認められるとしている。さらに1950年代後半になると高度経済成長期に入り、メーカー・ギャラリーにおける写真家の個展数が増加し、これが若い作家の育成という点で大きな効果があったと評価している。また1970年代後半に登場してきたオリジナルプリントを扱う写真専門ギャラリー、そして1980年代後半になると、1988年に開館した川崎市市民ミュージアム、1989年に開館した横浜美術館などの写真部門を持つ美術館が登場し、1990年に東京都写真美術館が第一次開館したことを述べ、その意義について論じている。

展示方法の変化では、終戦直後の10年間の写真展は、主に台紙やベニヤ板に貼り付け、あるいは木製パネルに水張りする方法が採用された。当時の写真は印刷出版を目的に制作されることが多かったため、展示される写真は消耗品として扱われることが多かったのである。そして1970年代以降、作家の個性を強調するオリジナルプリントの展覧会が多数開催され、写真を展示と同時に販売する展覧会が増加したこと。さらに1980年代以降、会場全体を利用してのインスタレーションの空間的な展示が出現したことなど、時代とともに変化してきた展示方法の変化について論述している。

作家については、終戦直後にアマチュア写真家団体が復興して写真界が活性化し、専門の職能写真団体も結成されるなど、若手写真家たちの模索成長期であったとしている。次に1950年代後半になると、「10人の眼」展出品者の中から「VIVO」という写真家グループが結成され、戦後の若い世代の写真家たちが輩出しはじめたと指摘し、さらに1970年代にはアメリカの写真界の最新状況が逸早く日本に紹介されたが、これらの展覧会が日本の写真界に大きな影響を及ぼしたと考えている。また、1970年代後半以降もう一つ注目すべきこととして、PPS通信社がデパートで開催した多数の作家個展を取り上げ、当時写真展を扱う美術館がまだ少なかった時期に、PPS通信社が積極的に国内外の作家を紹介する姿勢は評価すべきと主張している。

第3章は論文の中核をなす戦後の写真展・写真界の状況について論述したものであるが、展示会場、展示方法、作家などの項目に分けて的確な分析と考察を行っている。これにより戦後の状況が鮮明となり、さらにそれぞれについて歴史的意義を論じている点は高く評価できる。

第4章は、日本の代表的な写真家の作品発表形態について分析するとともに、写真展が社会や写真界に大きな影響を与えた例を取りあげ、果たされた役割について論じたものである。

戦前から活動してきた写真家は、写真雑誌での発表や、新聞社が出版する写真集を重視する傾向が強く、写真展の開催数は比較的少なかった。しかし戦後世代の写真家たちは、雑誌や写真集を重視する一方で、写真展の開催も同時に行うことが多くなった。戦後になると作品発表の形態が多彩になったことを具体例をあげて論述している。また、日本における写真展覧会のなかで執筆者が重視するのは、1968年と1975年に開催された日本写真家協会による二つの写真歴史展である。これらの写真展は、当時の写真界に写真資料の収蔵、整理の重要性を本格的に意識させることとなるとともに美術館設立運動の契機となり、その歴史の中でも重要な位置付けとなると論考している。写真にかかわる美術館が設立されるまでの状況を分析したものであるが、写真展との関連から行った考察は秀逸である。

本論文では、日本の写真展文化の特質や歴史的経緯およびその意義について次のようにまとめ結論としている。

日本の写真展文化の特質の第一は、メーカー・ギャラリーの存在とその功罪であると指摘する。高度成長期以降、メーカー・ギャラリーでの写真家による個展の数が顕著に増え、プロフェッショナルのみならず、若手写真家の育成、写真愛好者の増加といった点で効果があった。しかし、メーカー・ギャラリーは自社製品の宣伝のため、使用する機材や感光材料など様々な制限もあった。それに加えて、より多くの人に展示の機会を与えるため、会期が一週間程度と短期間のものとなりがちであった。さらにプロフェッショナル作家とアマチュアの展示が混在していることも多く、そうしたことに反感を抱く写真家も決して少なくなかったと論じている。

日本の写真展文化の特質の第二としては、デパートにおける写真展をあげている。デパートが集客を目的として、新聞社などと共催して海外の写真家の作品、あるいは話題性のある展覧会を多数開催したことの意義について述べたものである。特に1980年代以前、写真の企画展を実施した美術館は、東京国立近代美術館のみであり、写真展の数も限られていた。こうした状況の中で、デパートの写真展は、美術館の写真展の役割を分担したといえるのであるが、とりわけPPS通信社や西武美術館が開催した多くの写真展は、写真美術館の開設まで重要な位置付けになったと考えている。デパート展は日本独特の展示会といえるものであるが、博物館・美術館が少なかった当時の日本の状況がよく分析されており、その評価も的確である。

次に日本の写真展文化を語る上で重要なものとして、1970年代のオリジナルプリントの動向について論じている。1970年代以降、渡米経験のある作家を中心に、オリジナルプリントの概念が日本に導入された。さらに海外での展覧会に参加した経験をきっかけに、日本の作家はオリジナルプリントを重視するようになり、このことがそれ以降の作品制作や展示にも反映され、専門のギャラリーも開設されることになった。こうした経緯によって写真の価値と芸術性が次第に認められ、後の美術館での写真収集につながったと指摘し、オリジナルプリントを重視するようになったことの意義について論じている。

日本の写真展文化として最後に論じたことは、写真部門をもつ美術館や写真専門美術館の成立とその影響である。1980年代後半、写真部門をもつ美術館が開設されたが、東京都写真美術館が総合開館した1995

年には、年間 40 万人の入館者があり、写真界や一般大衆にとっても、写真の歴史的、社会的、芸術的意味を確認する機会が多くなった。こうした状況は、1980 年代以前には少なかったことである。写真美術館は、より幅広い写真文化の発展が期待される中で誕生したと評価するとともに、戦後 50 年の歴史の中で、日本の写真展は、独自の態様を示しながら発展し、それが写真美術館の成立にも繋がっていったと主張している。またこのことによって、日本における写真文化の進展の可能性がより高くなったとも述べている。そして日本の写真展文化は、こうした歴史的経緯を踏まえ、ますます発展すると考えられると結んでいる。

本論文は、戦後日本における写真展の発展とその変遷について写真展の展示方法、作家、テーマなどによる傾向と特徴を 4 期に分けて分析し、日本における写真展覧会の変遷の軌跡とそれが意味することについての確かな考察を行ったものである。さらに日本における多様な展示会場が写真文化の形成に果たした役割、写真界に与えた影響等についてもすぐれた論考を展開している。また、前述のように研究手法も自ら作成した詳細な「写真データベース」を基にしたきわめて堅実なものである。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 28 年 1 月 28 日